

九三 近世女流歌人物語

筆者は、頃日ある新聞社から、婦人問題に就て何か述べよとの註文ありしに對し、大凡左の意味のことをいつた。

女を褒める最上級の形容詞が「まるで男の様な」とか、「男にも負けない位」などいふのは恰も男と女とが同等でないことを認めてゐるやうであるが、それは體重とか筋肉とか生理的のものは仕方がないとして、智能的にまで格を下げることは、女性のため甚だ遺憾に堪へない。が、しかし事實の上に於て、舊來の日本婦人が男性に比し、政治・經濟・藝術其他いろいろの方面で、かうした扱ひを受けても仕方がない程、劣勢であつたことは否定出来ない、差當り自分の研究せる歌人關係の書物の上からいつて、家藏の個人人物傳書七百二十四種のうち、女子の傳記書は紫式部・春日局・井上通女・田捨女・蓮月尼など僅に二十八種に過ぎない、然らば女子の作品たる歌集、遺稿はどうかといふに、家藏此種の書物一千八種の中、女

子のもの四十八に過ぎず、更に之を大日本歌書綜覽に據るに、男子の歌集約一千四百種に對し女子百三十種を算へるのみ、又歌學書等に至つては恐らく比率を爲さざるべく、若し夫れ歴史・地理・辭典などには、女子の纏まつた編著といふものを、寡聞未だ知らない。創作や編著の有無又は多少が、必しも男と女との優劣を示すものでないことは勿論なるが、さりとては餘りに比率上で貧弱ではないか、これからの女性にも少し發奮して、現世のため後代のため、ドン／＼良書を創刊發表せられたい——

○
かく云ひは云つたものゝ、名にし負ふ東海姫氏國、傑出せる巾幗者流の其數太だ尠しとしな
い、日本列女傳・日本女子百傑 近世名婦傳・遊女の文學・傑人佳人・偉人と母・近世佳人傳
烈婦銘々傳・奥羽婦人傳・北里名妓傳・古今烈女傳・孝女傳・日本名妓傳・女武士道・名女傳
讚岐の佳人・明治烈婦傳・婦女善行錄・嗚呼古遊君・女流文學史・近世烈女傳・孝婦鳴盛編・
上は國母より・古今名婦傳・京華婦人のかどみ・大東列女傳・本朝古今闈媛略傳など、婦人を
専門の人物誌さへ、ざつと數へてこれだけある。

今、近世に於ける女流歌人を、筆者の手にある一千人近い傳記中から、順序なしに抽出し、

聊之を品隋して見よう。

國學四大人の隨一羽倉東丸を圍む女流中、其母貝子は最も著名である、其眞蹟は斷簡零墨と雖も珍重されてゐるが、先年筆者の獲たる詠草に、東丸母と署名せるを「母」の字を削り取つて、東丸の書と稱した不届なものがあつた。東丸の姪に當る眞崎にも秀詠多く傳はり、其夫杉浦國頭に就ては近年事蹟顯彰の事などあつた。同じく東丸の姪蒼生子には家集「杉のしづ枝」があり、女流ながらに諸侯の業を受くるもの多く、堂々一家を以て立ち、菱田縫子は其門から出た。愛知歌人中高名なる武女……徳川期の十六夜日記と稱せられた庚子道の記の著者……も東丸の門に學んだといふ。

岡部眞淵の門人には江戸在の女流が多くあつた、門人録にも三十餘名を數へる、所謂縣門三才女に油谷倭文子・土岐筑波子・鶴殿餘野子がある。倭文子の家集を「文布」といふ、二十歳の若さで歿した故であらう、遺墨は未だ見たことがない、同名に一井倭文子・太田倭文子等があり、よくそれ等の筆蹟を油谷氏也と呼んでゐるのを見受ける。筑波子にも家集がある、一般

に土岐頼房の妻にて進藤正幹の養女となせるは、土岐頼意と進藤正靜の誤である。餘野子は紀伊家の年寄、家集に「佐保川」「涼月遺草」がある、門人録には瀬川の名で出てゐる、同じ門人録に「よの女」とあるは別人であらう、頭書に加賀殿内とあるに徴し明瞭である。

芝崎榮子は豊後守妻とある、豊後守は同じ眞淵門なる好全の事であらう、家藏に之を證する文獻がある。森繁子は爲壽の妻、一に磐子ともある、同音の故であらうが、自筆には悉く繁とあり、眞淵も亦此字を用ゐてゐる。土井糸子は松平主殿守忠刻の養女で、三州刈谷の城主土井伊豫守利信の室、一般に利謙の室といふは誤である。

牧野路子は駿河守忠敏の室にて、忠利の義母に當る、歌集に「花賀都美」がある。松平葛子は能登守乘瀧の室、牧野家とは姻戚續きの關係から、路子に因て入門したか。紅子は初片野氏小曾根新八郎に嫁し、亦歌名高く。辨子は初吉岡氏、後に野村長ひらに嫁した、古今集打聽は辨子のために眞淵の講じたるもの、打聽の序文に依り其爲人が窺はれる、辨を「ともひ」と訓むことは清水濱臣も考證してゐる。

眞淵系の女流には、この他門人録以外の妙量尼・逸子・にほ子等があり、又三島自覺の妹さや子の詠草一卷に、眞淵加點のものがある、さや子の事は墨田川扇合に見える。最後に野原りよ女に言及せむに、同女に就ては一向所傳がないが、眞淵の自記に據れば、元武家の出にして若く夫を喪ひ一女一男あり、薄倅の身を、延享元年三十四歳の頃より眞淵に寄せ、其身邊を助けたる人にて、寶曆六年十月十一日、四十六歳を以て歿した、一説に眞淵の室などいふは此所以である。歌會にも出席し、詠歌も若干傳はつてゐる。

○

本居宣長の門流には、女歌人として特筆すべきものを多く見ない、宣長自らの採點に基くと稱せらるゝ門人録氏名の符號にも、女流にて二ツ星を載けるものは、僅に大館佐右衛門の妻民女一人のみである。本居豊岐女は春庭の妻、夫失明の後専らその代筆に努め、春庭の妹飛驒女は高尾氏に、同美濃女は小津氏に嫁した。いづれも詠歌を嗜んだが、末妹能登女には所傳を見ず、春庭の短冊坊間流布のもの美濃女の代書が最も多い。本居内遠の妻藤子は太平の三女、深く歌を嗜み所詠尠からず、鴨川集・饅玉集其他諸書に掲出され、歌集の外家藏に自筆詠草が多数ある。

本居春庭門の女流にも、僅に荒木三野の名稍聞ゆるに過ぎず、市岡みち子は夫猛彦の關係上或は春庭に師事せしか、但門人録には其名を見ない。

○

本居大平門には、知名の女流が若干ある、長田直子は鶴夫の妻、安政四年三百首等に其名見え。森貞子は熊夫の妻、和歌の外吹簫を能くした、浪華風流繁昌記等にて識られ。上田甲斐子は仲敏の妻、尾張歌壇に鉦々の名あり、詞藻秀逸當時及ぶものなしと稱せられた、甲斐子家集がある、また、仲敏隠し妻ありて、家に歸らぬことの續きしに、甲斐子、

宵々はいかなる方に通ふらむ我になかけそ夢の浮橋

と詠み、短冊に書いて密に夫の几邊に置き、徒遊びを止めさせた逸話が傳はつてゐる。安田さとは子は長穂の妻、名所歌集・鮎玉集等に歌を見るが、天保十三年二月二十二日、二十二歳を以て歿したること、安田耕氏の所報である。飯田志保子は秀雄の妻、登志子は秀雄の女にして年平の姉、其詳傳は飯田家録に據て詳である。鈴木敬子は重麿の妻、伊豫子は重麿の妹、伊豫史精義は其傳を載せて吝でない。叙上何れも一廉の歌人として聞ゆる其夫等と相俱して門に入りしもの。また小田郁子は清風集・鮎玉集等に其名見え、天保十年藤垣内翁年譜を編した。

本居内遠には、多くの女流門人があるが、而かも取立て、言ふべきものはない。

平田篤胤には、女流門人といふべきもの殆ど其名を見ない。

香川景樹を中心とする其一門では、遠く三代以前の景新の妻風雪女の歌短冊が、筆蹟其儘に「競馬」に出てゐる、けれども香川景三郎氏所報によれば、これは景新の次代一溪の妻にして、景新の妻は法名を秋知院光式露脆大姉といひ、安永九年七月二十二日に歿し、風雪女は天明二年六月十四日歿との事、新なる資料として記録し置くべきである。黄中の妻は「競馬」「京都名家墳墓録」等によれば、名を景子といひ、又

程を経しうき旅衣たち歸り親につかふる道やうれしき

といへる短冊に、井上通泰先生の裏書にて、「香川黄中妻景子、送佐々木有子歸伊勢路歌、有子者弘綱之叔母也」とあるを見るが、香川景三郎氏及小島吉雄氏によれば、黄中の妻は景平の女にて春乃（又春野）と稱すとある、景子は歌名などにや、尙穿鑿の餘地がある。景樹の妻は包子といひ、桂園遺稿等に其名を見る。

景樹門人録には京都住の高畑刀美子の名が見える、後の式部女にして、蓮月尼と併せて高名なること周知である。次に神方升子がある、秋園古香よしか家集といふ歌書は升子のもので、古香の名を以て聞え、歌名高く番附にも頭取の列にある。次に飯野力子の名がある、桂門の高足厚比の妻で、夫妻揃うて門にあつた、柳原安子は門地風格共に高く、第一級歌人に擧げるべきであらう。

○ 小澤蘆庵の門には矢部正子・藏田花子がある。正子ことは近年森銚三氏に依て、從來不明なりし事ども判明し、村上忠順の筆寫せる家集の存在せること、享年二十九歳なること、其他の事歴を知り得、靴を隔てずして痒を搔くに至つた。花子は本姓秦、諱を瓊華といつた、傳に東臯に學び書を能くすとあるも、其眞蹟は殆ど見ない、早世した故であらう。

○ 加藤千蔭の門に香習尼・秋山仲子・菊池袖子・鈴木稻木女等がある。香習尼は又阿實尼といつた、初名は千枝子、家集に「けけぶりのする」がある。仲子は秋山光條の祖母に該り歌書双絶

であつた。袖子は當時女流歌人中の第一級にあり、歌集を菊園集といふ。稻木女は吉原扇屋墨河の妻女を以て其名聞えた。

○
小野於通は、人も知る如く織田信長に仕へ、後に淀君の侍女となり、淨瑠璃作者を以て聞えた、於通には種々の傳説があり、二代目は「づう」と名を濁らしたなどの説もあるが、彼の豊太閤の醍醐花見短冊に據れば、開卷三十四枚目の

あかさりし花に心を残しつゝ我身はやどにかへりぬるかな

の短冊には「づう」と署名があり、次の三十五枚目には

花見ればいと心も若みどり老せぬ春に相生の松

とありて、之には「つう」の署名がある、此外に尙三枚於通の代筆せる分を見受けるが、一般世説の元和二年三月五日、五十八歳歿に従へば、於通此時四十歳なるも、別に寛永八年、六十四歳歿の異説があり、未だ確認を得ない、ともあれ後に徳川千姫に仕へ、歌道をも善くし、その美事なる筆札は今尙多く坊間に散在せるところ、近世女流歌人としては最古参といはねばならぬ。

寛文頃から元祿時代の女流歌人に、安藤龜子・田捨女・小野寺丹子・野中婉女・了然尼・破鏡尼・棍女・村上吉子・井上通女等がある。龜子は山田氏、安藤朴翁に嫁し、爲實・爲草の二大家を産んだ、屢官廷に出で、後水尾天皇及び明正天皇の殊遇を蒙り、今式部の名を賜はつた家集を今式部家集といふ。捨女は一般に俳人を以てのみ聞えてゐるが、宮川松堅や北村季吟に就て歌道を學び、詠歌も相當の數が傳はり、拙著「田捨女」にも採録した。丹女は、苟も忠臣藏を知るもの之を口にせざるはない、夫十内と共に歌を好くし、佐々木慶安に就て學んだ、十内との往復歌文又其詠草も傳はつてゐる、十内の短冊は今十數枚も儼存し、丹女の方も二三觸目した、慶安は其歿年不明なるが、元祿七年十月十八日付十内の歌道傳授請書に「金勝慶安老師參」とあるのを見た、丹女の辭世は

夫や子の待つらんものを急がまし何か此世に思ひ置くべき

といふので、食を斷つて夫と子の後を追うたのであつた。婉女は有名なる土州の偉人兼山の女、其所詠及び享年疑義等に就て、先年松山秀美氏は「土佐歌人群像」に發表せらるる所あつた。

了然尼は京都の人、初め東福門院に仕へ、やどり木と稱し詩文和歌を能くした、人妻ともなつたが出家して江戸に下り、鐵牛に投じたるも許されずして更に白翁禪師に入門し、武州落合に泰雲寺を建て、白翁を第一世に自ら第二世に任持し、當時井上通女と双璧に讃ぜられた。「紫の一本」の序は、尼が美貌を銅盤にて焼いた悲壯を物語るものである。破鏡尼は和泉の人、岸和田藩士の女であつた、膳所藩士菅沼曲翠の妻となり、曲翠武士道によりて傍輩の奸者を殺害し、自身は切腹したが、之を私争の如く扱はれ、其子も自盡の運命となつたので、遂に尼となり塚に隱栖し、元來好める歌詠三昧に入り、且は箏を弄びて悶を遣つたが、破鏡流と呼ばれて其流を汲むものも多くあつた、佳人薄命の例に洩れざる所であらう。

梶女は京都の人、祇園の水茶屋の女であつた、十四歳の頃より歌を詠み、當時界限の評判となり、家集を「梶の葉」といつた、聽て時の歌匠中院通茂の加點を受くるに至り、

忍ばれんこころの色をうつし見よ雪間に萌る春の若草

は、通茂加點中の一首である、其眞贋の信すべきものを多く見ないが、此歌外一首の詠草を、

今井似閑の大切に所有せしもの、今は家藏に囑してゐる、さればその頃既に珍重されたものと見える。梶女の養女百合子亦歌よくし、其短冊など時々散見する、貞潔にして女丈夫たりしこと、頼山陽其傳を作りしこと、家集「小百合集」に秀詠多きことなど、一代の才女たるに恥ぢない。町女は百合女の子、池大雅の妻にして、夫と共に冷泉家に歌を學び、又夫に學びて繪を能くし、玉瀾と號した、逸話の傳はるもの多く、家集を白芙蓉といふ。

村上吉子は京都の人、近衛信尋に仕へ、信尋の女姪姫水戸義公に嫁するに及び、従うて水戸藩に仕へ、後に薙髮して習之と稱した、其遺稿和歌を安藤年山の編せしもの「蝶夢集」である井上通女は丸龜の人、詩歌書を能くし淑徳高く、歸家日記等の著作あり、歌集を「往事集」といふ、頃日其銅像の縣立丸龜高等女學校内に建設さるゝ事を聽く。

寶永頃から化政度へかけて、湯淺瑠璃子・宮部萬女・慈門尼・只野綾子・慶徳麗女・山梨志賀子等がある。瑠璃子は岡山藩の大儒元禎の母、野村尙房とは従妹である、婦女鑑には好位置にあるべき人、歌を能くしたが多く傳はつてゐない。萬女は歌人義正の妻、高崎藩に其人ありと聞え、夫及び子義直との風蕩を集めたるものに、三蕩類聚・三蕩日記がある、冷泉風の書を

能くし、短冊など多く傳はつてゐる。

○
慈門尼は彦根の人、澤村琴所との間に挿話があるが、操行端正其詠歌天聽に達した、家集に「松風集」がある。只野綾子は一に工藤真葛子といふ、江戸の人にて多くの著述を有し、風藻歛すべきものがある。慶徳麗女は伊勢の人、俳家として其名を有せるが、筆を修史小説類に染め、著作の多數なる事正に女流中第一人者を以て目すべく。山梨志賀子は駿河の人、高名なる稻川の母にて、芝山持豊の門に歌を學び、其旅行記に「春筵道久佐」がある。